

## 7. 当科における歯原性嚢胞に対する処置と治療経過

○尾田 順民、松本 敏秀、二木 寿子、中田 稔

(九大・歯・小児歯)

小児歯科臨床においてしばしば遭遇する歯原性嚢胞は、時として永久歯歯胚の位置異常など、歯列咬合の育成に少なからぬ影響を与える。

成長発育期にある若年者の含歯性嚢胞と歯根嚢胞については、その基本的処置方針は、手術の侵襲を少なくし、その後の歯列、咬合および顎の発育に対する影響を最少限にとどめるとの観点より、先行乳歯を抜去後、開窓により永久歯を保存萌出させることが原則とされている。開窓による減圧により、嚢胞によって圧迫され、転位していた永久歯歯胚は、正常な位置への萌出が期待できる。しかし場合によっては、萌出余地不足、歯牙の交換順序、萌出時期の乱れなど、すでに嚢胞による影響を受けていることがある。この様な症例に対しては、その歯列咬合状態を分析し、正確な診断を行なった上で、適切な咬合誘導処置を行なう必要がある。

そこで今回演者らは当科で経験したこれらの嚢胞で、開窓後咬合誘導処置を行なっている症例について報告する。